



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第50巻第
2号)

AUTHOR(S):

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第50巻第2号). 泌尿器科紀要 2004, 50(2): 150-150

ISSUE DATE:

2004-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/113299>

RIGHT:

4. 論文の訂正：査読審査の結果、原稿の訂正を求められた場合は、40日以内に、訂正された原稿に訂正点を明示した手紙をつけて、前記泌尿器科紀要刊行会宛て送付すること、なお、Editorの責任において一部字句の訂正をすることがある。
5. 採択論文：論文が採択された場合、原稿を3.5インチフロッピーディスク・MOディスク・CD-R・CD-RWのいずれかに保存し、編集部へ送付する。ディスクには論文受付番号・筆頭著者名・機種名・ソフトウェアとそのバージョンを明記する。Windowsの場合はMS-Word・一太郎、またMacintoshの場合はEG-Word・MS-Wordとし、特にMacintoshにおいてはMS-DOSテキストファイルに保存して提出すること。
6. 校正：校正は著者による責任校正とする。著者複数の場合は校正責任者を投稿時指定する。
7. 掲載：論文の掲載は採用順を原則とする。迅速掲載を希望するときは投稿時にその旨申し出ること。
 - (1) 掲載料は1頁につき和文は5,500円、英文は6,500円、超過頁は1頁につき7,000円、写真の製版代、凸版、トレース代、別冊、送料などは別に実費を申し受ける。
 - (2) 迅速掲載には迅速掲載料を要する。5頁以内は30,000円、6頁以上は1頁毎に10,000円を加算した額を申し受ける。
 - (3) 薬剤の効果、測定試薬の成績、治療機器の使用などに関する治験論文および学会抄録については、掲載料を別途に申し受ける。
8. 別冊：実費負担とし、著者校正時に部数を指定する。

Information for Authors Submitting Papers in English

1. Manuscripts, tables and figures must be submitted in three copies. Manuscripts should be typed double-spaced with wide margins on 8.5 by 11 inch paper. The text of all regular manuscripts should not exceed 12 typewritten pages, and that of a case report 6 pages. The abstract should not exceed 250 words and should contain no abbreviations.
2. The first page should contain the title, full names and affiliations of the authors, key words (no more than 5 words), and a running title consisting of the first author and two words.
e.g.: Yamada, et al.: Prostatic cancer · PSAP
3. The list of references should include only those publications which are cited in the text. References should not exceed 30 readily available citations. Reference should be in the form of superscript numerals and should not be arranged alphabetically.
4. The title, the names and affiliations of the authors, the director's name, and an abstract should be provided in Japanese.
5. For further details, refer to a recent journal.

編 集 後 記

京都大学医学部では今年の入学試験から面接を導入した。入試に面接を導入していない医学部は、昨年の時点で熊本大学と京都大学のみであったと聞いている。導入に当たっては、その利点欠点をいろいろな大学に問い合わせ、また入試面接に歴史のある大学を訪問して直接意見をうかがってもみた。面接のやりかたや評価方法には各大学で様々な特徴があり、面接の功罪に関しても大学間で異なった意見があった。

それらの意見を参考に京大医学部史上初めての入試面接が行われたのだが、その内容はたいそう興味深いものであった。まず、一般に言われているように、多少とも人生経験の豊富な社会人や女性の面接点が高い。「おほこい」男子高校生は、少し頼りなく柔軟性に欠けるような印象をうける場合が多いようだ。30年前の自分を振り返っても、医学部教授の前で好印象を与えるような気の利いた受け答えなどとうてい出来なかったと思う。その点、女子高校生は違う。自分の意見を堂々と、時には笑みを浮かべながら快活に話す。教授を煙にまくことなど朝飯前といった様子であった。

面接の大きな目的のひとつは、医師としての適性に欠ける受験生に「お引き取りいただく」ということである。実際の面接でもお引き取りいただいたほうが良いと思われる何人かの受験生が気にかかった。ただ問題は面接官によってその印象が大きく違うことである。面接官の教授自身にしても、もし面接を受けたら「お引き取りいただく」ことになる可能性が高い。

(小川 修)